

報告**地域日本語教室向けのビギナー教材開発 進捗報告 (平成28年)**

A Progress Report on the Development of Teaching Materials for Beginners
for a Local Volunteer Japanese Class (2016)

国際言語文化アカデミア外国籍県民支援事業担当部会¹

Foreign Residents Support Group of ILCS

0. はじめに

平成27年度はビギナー教材について、これまでにアカデミアと何らかのつながりを持ったボランティア団体の方を対象に現場からのニーズを聞き取った。その結果は、当部会名で国際言語文化アカデミア「紀要」第5号(2016)に発表した通りである。繰り返しになるが、ボランティア団体にとって日本語学習歴をほとんど持たない人が突然来訪、入会することは、対応できる人材が限られているため負担ではあるけれど、受け入れて、できる限り対応しているということを知り得た。そして、その負担を軽減しうるような具体的なツール(教材)の要望は次の二つの用途に絞られた。一つは①入会手続き関連での聞き取りをするためであり、もう一つは②入門期の日本語指導のためである。具体的には来室当日、聞き取りだけでなく、すぐに教材としても活用できる単発のもの、もしくは、文字も絡めて、意味のあるやりとりとつなげた教材が求められた。このほか、とにかく絵カード、といった視覚的教材への要望もあったが、コンテキストを欠いて絵カードだけを提供しても、現実にはなかなか使うことが難しく、ただの収集に終わりがちである。これについては、本教材開発事業の対象とはせず、コンテキストの中で必要な視覚教材を、既存のものの中から探し出す力を育てることのほうが重要であると考え、今年度の「日本語ボランティア活動に活かすPC」「日本語学習のためのイラスト教材入門」等の講座の内容に反映させてきた。

以上を踏まえた上で、今年度の取り組みを報告したい。

1. 試作教材の作成

平成28年度はニーズにこたえられるようなビギナー教材を試作し、秋以降、それをボランティア団体に紹介し、試用を依頼、フィードバックを得て平成29年度の本格的作成と配布に備えるところまでを予定していた。視覚的要素を重視したビギナー教材にすること、当初の計画通り、シート形式にすることではプロジェクト・メンバーの意見の一致をみたが、ビギナー学習者への具体的な対応機能をどうするか、文字をいれるか、いれないか、多言語化をするか、文型を紹介するか、など、細部ではなかなか合意形成にいたらなかった。理念の押し付けにならず、現場で受け入れられることを重視すべきという考えのもと、まずは細部が不統一でも、順次試用に供しようということにした。そして、20点が完成したところで紹介と試用提供を開始し、フィードバックを受けながら、進めていくことにした。

20点の中から、対象学習者等が限定されるものを除き、実際に試用に供したものは、絵シート16点25

枚である。（1点が複数シートから構成されるものもあるため、点数と枚数は一致しない。）絵主体で、使用目的別に整理をすると、コミュニケーションを図るねらいのものが12点、文型や文字の習得をねらったものが4点、使用例等の解説を付したものが7点である。

トピック的な整理をすると、以下の9種に大別できる。自己紹介（挨拶・会話）、出身地（世界の国）、今いるところ（日本・神奈川県）、来日状況（時期・同伴者）、好きなこと、仕事、言語（理解できる言語一語別・技能別、使い分け）、ものの位置関係、文字（かな表）。

これらのトピックは、新しく教室に来たばかりの学習者からこのような情報を取得できたらいいだろう、こうした活動をしたらいいだろうという個々の作成者の考えで採用された。ただし、相互の作業を見ながらの作成であるため、各シートで取り上げた題材に重複はない。シートの整理番号は便宜上のもので、難易度や使用順序等にしがったものではない。その他、試用に提供するにあたり、批判的意見や自由な要望が出しやすいよう、過度に体裁を整えることは避けた。教材点数はさらに追加していく予定であり、それらのフィードバックを受けつつ、討議の上、最終的には取捨選択して整えることになる。

2. 試用提供の実際

実際に試用教材を協力者に届ける際は以下3通りの方法のいずれかによった。①すでにアカデミアと一定の信頼関係にある団体に持参して紹介し、試用後のフィードバックをいただくことを前提に教材を提供する、②まったくこれまでの経緯を知らない方々に紹介して協力の意向を示された方に配布する、③昨年度の聞き取りの際に協力を申し出てくださった方に依頼する、の3通りである。

試用に供せる教材点数がある程度まとまったころ、折よく「かながわ国際ファンクラブ」主催「スペシャルサポートウィーク」への参加をする機会があった。これまでの経緯をご存じない方と接触できるよい機会だと考え、まず上記②にあたる方に配布することにした。「ミニワークショップ 日本語はじめての人が来た！」（平成28年8月26日）として、当日の参加者を待った。この題目で聞きに来られる方は、その時点で、ビギナー学習者についてなんらかの意識をお持ちであることが予想されるが、それが昨年度の聞き取りと同様のものであるかということにも私たちの関心は向いていた。以下はその実施報告である。

【実施報告】

日時：8月26日（金）13:00-15:00 「ミニワークショップ 日本語はじめての人が来た」

参加者：6名（ボランティア経験者が5名、未経験者が1名。経験者のうちその時点で活動中の者は3名、いずれも5年以上の経験者）。

その他：大きなテーブルを囲んで全員が着席、講師側にホワイトボード。

はじめて日本語を学ぶ人をめぐる意見交換から授業をスタートした。はじめての人を受け入れた経験から、「その日にパートナーが決まるので準備できない」「反応がないとこちらの話がわかっているのか心配」「四苦八苦しているうちに来なくなってしまうことが多く、対応に困っている」などの声があり、初期対応に苦慮している様子が分かった。中には、最近はじめての学習者を担当し、対応に困っているため、このイベントに来たという方もおられた。

さらに次のような問いかけをし、参加者間での議論を深めた。

問 1.「はじめての人」が来たらどう対応しますか？どうしたらいいと思いますか？

問 2.その次の段階として、どんなことをしますか/したらいいと思いますか？

問 1 については、最初に行う「自己紹介」で、地図、カレンダー等のレアリアや、イラストを多用し、指さしも含めてコミュニケーションを図るといった意見や、媒介語を使う、同国の学習者に助けてもらう、まず自分の話をしてから「あなたは？」と質問を投げかけることでお互いを知り合うことができるといった意見が出た。

問 2 については、買い物(いくらですか)、物や場所を尋ねる(どこですか)、病院で必要な表現、日にちや曜日、コミュニケーション・ストラテジー(書いてください、もう一度/ゆっくり言ってください)など日常生活ですぐに必要となりそうな場面や表現を取り上げるという意見に加え、媒介語で話を聞いてもらえる相談窓口がどこにあるかを知らせるといった、学習者が日本で自立した生活を送るための情報提供という側面も大事であるという意見が出た。

また、学習者本人が話したいこと、大事にしたい言葉や場面を捉え、学習に取り入れることや、それらをボランティアとともに実際にやってみることによる習得促進の必要性も挙げられた。

以上の話し合いを受けて、アカデミアの作成した「はじめて教材試用版」を紹介したところ、日本語教室でボランティアを行っている3名全員が関心を持ち、試用協力の申し出があったため、意向を確認する書面を交換して教材を提供した。

（「実施報告」ここまで）

このワークショップを通じ、昨年の聞き取り調査から知り得た事柄が、生き生きと語られるのを目の当たりにすることができた。そして、議論が深まる中で、活動中のボランティアがただ教科書を開いて手をこまぬいているのではなく、ビギナー学習者との意思疎通のために多様な手立てを用いていることがわかった。学習者の自立した生活を成就させるために寄り添おうという姿勢も顕著で、かながわのボランティアの実力を再認識することができた。

続いて、先述の①の方法一すでに関係のある団体への試用教材の提供を9月、11月に実施した。2団体が対象となった。いずれも担当者が持参し、口頭で教材開発の意図を説明した。すでに関係がある団体であるからこそ、過度なアピールは控え、教材の押し付けにならないよう注意した。教材試用希望者には、その条件としてフィードバックの必要を伝え、個人として協力の意向を書面で確認の上、教材を提供した。現時点(12月末)で18名の方の協力が得られている。

最後に、③の方法、個人で協力を申し出てくれた方への試用提供は、昨年からの時間の経過もあり、協力の意向を再確認する形で改めて書面を交わしてから行った。約20名の協力者は県内広域に散っているため、配布は郵送によった。

3. フィードバックに備えて

試用についての制約は特につけていない。協力者はどの部分でも、使えそうだったところを取り出して使って構わない。まとめて数枚が1点をなしている場合でも、1枚だけ使ってもよいこと等を説明して配布した。入門期の学習者がすぐに現れるとは限らないため、フィードバックのためには3か月から4か月の猶予をおいた。したがって、フィードバックの収集は1月から3月にかけて、対面または電話による聞き取りで行う予定である。

4. 作成上の課題

上記のような活動の一方で、予期しなかった問題が明らかになっていた。私たちは当初からマイクロソフト社がワード等で提供する抽象的な図形、およびウェブ上にある著作権フリーで配布可能なイラスト素材を用いて教材を作成することにしていた。しかし、実際に教材に使おうとすると、ウェブ上には膨大な数のイラストが存在するにも関わらず、語学学習用として適当なものは極めて限定されるということに直面した。大半のイラストには性別、年齢等をはじめ、文化的な情報が入りすぎていて、学習上意図された事柄だけを学習者に伝えるのには問題があった。

つぎに、イラスト使用に関する制約である。ウェブ上での配布までが許可されたフリー素材であっても、実際には事細かに使用条件が決められていた。例をあげれば、「同一画面で他の作者の作品と一緒に使ってはいけない」、あるいは「使うときは1点だけをそのまま使い、同じ作者の作品でも、複数を組み合わせると新たな絵柄をつくってはいけない」、また、それとは逆に、「使用の際にはオリジナルのままでなく、改変を施した上で使うこと」など、サイトごとに異なった多様な細則が掲示されているのだ。合法的にウェブ上で配布できる教材を作り上げるには、これらの規則をクリアしなくてはならないため、適当なものを探すだけで、当初想定した以上の時間が必要となる。そうでなければ、抽象的な図形を組み合わせ、あれこれ加工して具象的な絵に仕上げるために、相当の時間を費やさねばならない。手元にある画像関連のソフトウェアを用いても不足が多く、思い通りのイラストを描きあげるのは難しかった。

配布開始までに完成した教材が20点と決して多くないのは、こうした事情による。こちらにアイデアがあっても、すぐには画面に描けないからだ。ましてや、絵柄の統一までは到底望めない。今後、場合によっては、本プロジェクトのメンバーによる手書きの作品をスキャンして用いることすら視野にいれている。しかし、イラストの質は教材としての魅力を左右する部分であるだけに、簡単に判断するわけにはいかない。このように作成上の課題は決して小さくないのだが、学習上、必要な点数を精査しつつ、かつ協力者からのフィードバックをも参考にして、ウェブ配布可能なイラスト教材を実現するための具体的な工夫を重ねることで、何とか解決の道を探りたいと考えている。

参考文献

外国籍県民支援事業担当部会. (2016).「日本語学習入門者に対する日本語ボランティアの意識調査」
『神奈川県立国際言語文化アカデミア紀要』5号 pp89-96.国際言語文化アカデミア.